和訓栞

伊之部

三

837
34
48

国立国会図書館　タイトル『和訓栞』　請求記号 837-48

ガラス使用

837-48

曹山文庫

伊の部

洞津　谷川士清　纂

根岸信輔氏寄贈

昭和八年　帝國圖書館

發語の詞なるべし尓雅に伊維也注なる數語辭とあり悉曇にも伊の字を根本とせりと思ふ神代紀乃所なる以和多羅素戔嗚尊を伊緣立之射立爲兼伊隱伊積なとも數挙て数ふ屋ゝ守○人名に名に孫りなるいの人名なる

△出雲風土記に日本紀乃所に毛野に見えたる伊賀彦の系統なる家なる妹い續紀宣命に藤原朝臣麻呂等伊又百濟王敬福伊又國王伊乃數多〜○神代紀に氣吹なるべし○靈異記に脯を訓て肺

△脯とつけ肺を肝也と注せり漢貨殖傳に濁氏以胃脯而連騎注に羊に胃に

△射ゆる也胃脯とつづけしるに訓まる○射ゆる也暑語ゆみ及いなり万葉集に

△弓といとゝみ〜こと乃とあり○鑄もいる也暗なり万葉集に寢とゝ宛りのぬるいも

△孫どいとやもとくぬるいこそ孫ゝ且孫いの乃孫られ孫をなどいふ皆同〜日本紀に長眠

△をなどいとゝあり○万葉集に馬聲といとゝあるハ義とゝて訓なるなり○孫字

五十九字とよむハ五字ゟ多ク成り五十九古語いろとゝまずといふ

△いろ

△いい　唯字とよむも音ハ唯字ニハ成らず倭語ハ答辞なるべし曲禮ニ先生召
死諾唯而起ともゝ文選注ニ唯ハ謙應也といふ

△いうど　猶子と書り禮記ニ兄弟之子猶子といふ西土ニも姪ハ稱とせ
ると古ハ今ハ貴ク縉紳家ハ義子ハ稱となり

△いえ

△いを　倭名鈔ニ魚ハ俗語也といふ伊勢物語ニ申りて侍しをと成
なり○同書ニ脯をいをハ魚ハとよみ魚丁をいをかゝらハ名とあり
いをさ　万葉集ニ防人ハ佐ゆいハ義語小菜なり菜をさとよむハ日本紀
ニ見ゆ　一説ニ五百箭ハ義乎ハ本ハ誤なりともいふ

△いう　五十日をよめるハ兒生まれて卒日ニ當る時ニ祝ふなりひふてあふもい
ふともひむまとハいふなと見ゆ　一説ニ七七ハ物ゝ忌なるなり玉笑零音ニ人之
初生以七日為臘一臘而七魂成故七七四十九日而七魂具矣とゝ

今俗生兒をいうごといふも五十日兒ハ多なりまゝ羊を踰さる小兒ハ家とい
ごとゝ○烏賊をいふハ形をいうめ〳〵く骨をあとやうなる名つる成べし背
上ハ甲骨ハ海螵蛸なり五島いうと称ゝ玉藻〳〵又腹中小墨汁ありて常ニ
よく噀て人ハ害を防く又予ハ族家ニ井中ニ五酒いうハ子を望ハ多ハ海
小兒〳〵○衣架ハみそうけとよむ今ハ衣桁といふ衣桁ハ衣を曝ハ羊
揚也杜詩ニ翡翠鳴衣桁と見て今ハ衣桁ハ衣を曝ハ羊揚ハ後世
さかりハいうよかるゝ成ハ海辺を人ハかるん
古事記ニ罵詈曰伊賀所作仕奉於大殿内者意禮先入と見て中古
ハ物ニ伊賀分なるゝ見て今ハ吾ハ多ハ万葉集ニ汝と那賀と
いふるめ〳〵○伊賀ハ郡号ハ伊賀ハ猪ハ音ハ猪田表紙ハ女吾娥津媛命ニ
見ゆ　一説ニ風土記ニ見て倭名鈔ニ伊賀郡阿我と見ゆ○倭名抄ニ栗刺
とあるハ射毛ハ義なるべし蒺藜人ハ毛ハ球とも見ゆ
史本集り
ゟり云ゝ人と判てふいがゝり氏ハ中ゟ力ハ力ゟ

苞代開くなどゝ云ひしいふ倭名抄に鑄鍛とあり唐書に義甫笑中有刀とゝ云ふ

いゝど　如何又云何とゝあり いかゞいんいを等皆同語〻又若爲を奈何も同し那ハ

如何奈何共に合音にて直言之曰奈何とゝ云ふ唐詩に無奈と無

那ともゝ見えたり何如も同し詩詞にそハ孰與乃意に用ふ奈何を奈河ゝ

ゝ通し用ふるなり怎麼ハ俗語なり

いゝし　日本紀に嚴字重字祝詞式に茂字とゝあり忌惶根尊は泣とゝふなり

屬し　梵語に郁伽翻云威德とゝ云ふ○國語にいかりの俗語も見えたり

いゝ沽　怠怒といふ氣上るに成なり素問に怒則氣上とゝ云ふなり神代紀に起

嚴顔をもふあり

いゝむ　犬猫なとに物を喰ふを云ふ法華經に喰噬とゝあり虚堂錄に千孫噬

實とゝ云ふなり童蒙頌韻に信とゝあり いゝづゝなども

いかゞさ　万葉集倭名抄等に孫離とゝあり神社に忌ハ忌離に成なりといふ

いゝさ　源氏にいゝさゝ沽又たけくいゝさなとゝ云ふ猛とゝあり いゝし小同し○倭に

大あるし多ゝいゝとゝいふもいゝさ小同し

いゝさ　倭名抄に鎔字とゝあり淫書に沒に鑄鉄形也とゝ鑄形に成なり摸範を

も譯なり童蒙頌韻に型とゝあり

いかゞ　倭名抄に桴筏とゝあり艀艇も同し烏賊牛に成家へしたゝむいゝなども

いゝぶ　倭名抄に碇を訓なり万葉集に定石とゝ云ふ石に成なり

用ゐる家へし鉄猫木猫なとハ後世に事なり椎家を造る事中山傳

伝孫に見へ三才圖會に北洋可施鉄猫南洋水深惟可下木碇とゝ云ふなり

天工開物に八錨に作る○伊勢年中行事に鍬山伊賀利に祈事なり祈風抄に

荒祭宮鍬山伊賀利とゝ西後式帳に伊加利比女命とゝ云ふもみえたり鍬木ハ刈取

いゝけ　いハ發語なるなり又射に成なるや源氏物語に火とゝ云ふ松茸紙に皇

れいけとゝ云ふなり○尊海東に乃に成に成れあるいけなとゝ云ふなり

所いとゝ云ふなり湯又に成れなとゝ云ふなり○職人哥合蒔

繪師の所いけ地といふ今俗いつけといふ是なり或ハ沃懸地と書凡て物とま

ぬけ品といふなりいけ地の表方ハ大理用之とゝ云ふ○平家物語に鑄懸と書鈿

をゝめ字書ゝ金飾器口也とゝ云てゝうゝけ師あり宋小説ゝ老學菴續筆記を
引て市井中有補治故銅鉄者謂之骨露とゝ云てゝうゝ
いをゝ　爭をゝ光りのかんとゝゝうゝそゝれを感へし〇いをゝうゝ真字伊勢物語小如
何是波とゝゝうゝをゝハゝかゝれ略感へし
いゝづゝち　雷とゝゝふ神代紀ゝ雷公とゝゝる又ゝ古事海経ゝ雄雷雌雷とゝゝり嚴祇
ゝれをゝといゝうゝつゝちハ山祇をゝ雷とゝゝひ野槌を野雷とゝゝも云ゝるゝ日本紀ゝ使人等ゝ
怨徹于上天之神震死足島ゝとゝ云てゝうゝ足嶋ハ遣唐使ゝれ傳人ゝれ名使人名を
淡せし罪ゝ延喜八年ゝ禁中ゝて霹靂神火ゝりて侍臣ゝ天亡せし事ハ扶
桑略記ゝ又ゝ菅家貶死ゝれ罪惡ゝ為世豫ゝて一を婆ゝ為ゝて葬ゝ此ゝ
大雷ゝて指ゝ大虚ゝ引拳ゝ見絶ゝ為ゝ害せし婆ゝ為ゝとゝて〇出和ゝれおよいゝづゝち
村ゝり古へゝれ祈岳之万系集ゝいゝうゝれゝとゝゝる〇みしも見ゝり〇鄭玄注ゝ天を怒ゝとす
いゝうゝ　舊事紀ゝ嗟ゝとゝあり嗟吼ゝれ恐ゝれ唯ゝ為ゝてゝごゝうゝぐゝとゝゝふハ怒ゝる姿
ゝり似ゝり左平記ゝ注治之負ゝ事ゝ為ハ格ゝれ嗟ゝるゝやゝうゝてゝとゝ云てゝうゝ〇日本紀ゝ
班鳩ゝとゝゝめゝる嗟ゝ為ゝて名つけゝゝ為なゝべし倭名抄ゝ鵤ゝをゝとゝあり新撰字鏡

図し鵤ゝ嚙ゝをゝ霊異記ゝハ鵤鵤二字ゝをゝとゝありゝ桑鳶一名蠟觜雀
とゝふ色ゝり觜大ゝ黄色ゝて紅ゝ色ゝれゝ色ゝれゝゝり下ゝ云
第ゝ豆甘しゝやゝいゝり著聞集ゝれ奇ゝり
いゝうゝ豆ゝ為しゝ為ゝ為ゝて為ゝれゝ為ゝりゝ紀ゝ為ゝのゝ
嗚呼ゝれゝりこゝりゝゝゝゝゝ古語拾遺ゝ神代ゝりゝて
ゝり今豆まゝしゝ豆ゝり豆ゝたゝゝゝゝふ〇和名抄ゝ丹波ゝ何鹿郡ゝいゝう
ゝどゝゝみゝゝゝゝハ班鳩ゝ為ゝて為ゝりゝ〇伊勢新物語ゝ伊賀留我神社式ゝる
又ゝ船村ゝり班鳩猛ハ播州ゝり〇拾遺集ゝ名ゝいゝうゝゝゝ事
ゝて云ゝり馬ゝれ毛ゝれ名ゝりゝゝ
いゝがゝし　今の民俗ゝ云十寛ゝ為ゝ神名帳ゝ攝津ゝ住吉ゝ神社ゝり云十日祭ゝれ猪渡之云十日足彦命ゝれ事ゝ為ゝ仁紀ゝ云ゝ
いゝだゝうめ　源氏ゝ又ゝ伊賀專ゝれ為ゝ狐ゝいゝとゝゝゝり伊勢話ゝ紀ゝ專女三
狐神ゝいゝうゝりゝゝゝゝゝゝ後日本紀ゝ伊賀ゝ為ゝ献玄狐ゝ云ゝ延喜式ゝり玄
狐ハ神獣也ゝとゝ云ゝゝゝゝ岷江入楚ゝ伊勢伊賀ゝれ媒ゝれ事ゝ為ゝ

いつとゝいふハ専ハ尤女ハ称ス狐ハ人をたぶらかすもの〇彩孩
樂紀ニ射干坂伊賀専之男祭ト云ヘリ

△いき　氣息ト云ヘリ神代紀ニ云ヘリ生ル氣ハ韓詩外傳ニ人得氣則生失氣則
死ト云ヘリ〇俗ニいきれ云ヘリいとゝ云ヘリ氣ハ氣ナリ史記ニ意氣揚ク
ト云ヘリ意氣地ト云ヘリ〇いきをゝけハ呴カリ嘔ト同シ童蒙頌韻ニ噓
ヲいきをゝけとゝむ老子ニ或呴或吹ト云ヘリ注書ハ呴噓皆開口出氣
也ト云ヘリ大嘗祭式ニ一撫一呴ト云ヘリ江次第ニ到後清之處以人形令
呴給ト云ヘリ　いきを　せいを延ル　ヲ反ク　ナリ〇鬱蒸ハ氣ト云ヘリ氣ハ氣ト云ヘリ
ヲ反ク　ナリ〇霊異記ニ酡ト云ヘリしとゝみ酡熟ト云ヘリ
いきをを　今ハ云ヘリ方言ニ氣ヲ氣之絃ト云ヘリ絃ハ弦ナリ
いきゞゝ　源氏ニいきゞゝけそひてト云ヘリ神代紀ニ氣宮遊仙窟ニ氣
調ト云ヘリ氣機ハ氣ヲ云ヘリ
いきほひ　勢ト云ヘリ息延ハ氣ナリ〇神代紀ニ德ト云ヘリ齋部八箇祝

詞ニ德ハ勢也ト云ヘリ
いきぶき　源氏ニ云ヘリ觸穢ト云ヘリ氣觸ハ氣穢ハ展轉ス甲乙丙ハ
法ナリ延喜式ニ云ヘリ
いきみゞ波　二水記永正十四年七月ハ下ニ親王御方其外御所方御生見
玉ハ沙法ナリト云ヘリ生霊ハ氣穢ヘリ八日ヨリ十三日マテハ内吉日ヲ撰
ミ行ハセラルヽ事ト云ヘリ四季物語七月下ニ玉まつり半一ト云ヘリ
ヲ反ク　ナリ
ヲ反ク　ナリ
ヲ反ク　ナ

△いく　生とのの氣と家屋とう○幾とのひしも氣息れ粉ありなる河をへしいく
つとうなる此部見なり○往といくとあむ事万葉集に多くあるとう日本紀に
勿往とおいでとあるいとゆとなる例老と日本紀に おいとゆと注し又と余も云
おいひとける部見し○可歳事といくといひ可歳こくといふぬといふ俗語も
往不往は家歳屋〜

いくさ　軍とあり伍〜相属もとる制よりて訓を五くさる此義なりとのり
○日本紀に射といくさ也とあり射合箭(イクハスサ)は前は家軍也や○神武紀に前軍
後軍と男軍女軍と名とり後世は追手搦手は称見なり○万葉集に軍士
とあり拙ふ我ふ河といくさと戦ふ河ハいつも及ふ我ふぬ河も
はハものといくさとふなりとあるとうさ此神代紀に兵とあり
いくハ　日本紀に的とあり射といふもあれハ弓家歳へし藤原宮造葉部
も的邑と見えとう淡路は名ゆも育波(アハ)とう尾張国海部郡に伊久波神社
なり式に見ゆ○伊勢三重郡に生葉村あり
いぐ〜　五十櫛なり舊事紀に見えとう万葉集にいぐ〜たてみをすゑまつと

とあり後世に〜堀川百首荒和稜ゆもあり
いくと　應神紀に御方に見えとう粉ハいい義結とう八石とふことと也とう万葉集
ゆも辛は活るいとうとも海は底奥津いとうとも見てとう鈔に山張乃は俗石
を謂て久利とすと見てとう一説ハいい也とも海の石ハ色の墨ハ黒とふ
ともいとう○いさよひ日記に大井川あり
河原いとうとやいとるとなりといふハ
幾人(イクタリ)といとうといふ
いぐるを　矰繳とふ射とるなり或ハいぐるを
繳とふ義なりかぶるとうも
いとひたる　出雲国造神賀詞に生日は足日と見てとう生玉足玉生鳴足
嶋生國足國とあるとう祝語に○出雲風土記に足日山見ゆ
△いけ　沼池とふ魚を生るとう名つる歳へし○いけの湯ハ和名鈔に伊波度云
弘仁氣とふ温泉なり世記に其塩淡滿溢浦名乎伊氣浦止弥支其處尓祭
相氏御饗仕奉手淡海子神止弥氏社定給支と見て式に粟皇子神社と出

とり皇子は文字を假りて神名秘書世記等は加筆し謬て道生貴とかく
も非なり屋〻とは松木村はうるあり
いけを　池簀は倭名鈔に籬とあり韻會に池中編竹籬以養魚曰籬と
見ゆ源仲正集に
　　　

国立国会図書館　タイトル『和訓栞』請求記号 837-48
力ラスト使用

とてもてうしたりけるとかたをとりて海賊とのたまへり
やがてかの一族の人々を召集して海賊の事を問はせ給ふ
とのたまへば　聞くなりとて
こゝにはべりけるなり
○ものしたる縁なるべし
ものしたる縁なるべし　ものしたる縁なるべし
ものしたる縁なるべし　ものしたる縁なるべし
ものしたる縁なるべし　

また小兒哭泣の切なるを泣ともいふ　とりて泣をとりて泣ともいふ

いさ強し　日本紀に功勲まさる幹字古語拾遺に忠誠なることあり勇ミ雄々しき義なるべし

いさくら　日本紀に輕小聊等の字を名伊勢物語に簡略なるあり　いさくは又いさくさともいふ　いさ強なるやうなる義し素冠詩注に聊猶且也とあり又聊不敢博大之辭と注し又薄もうすく十分ならざる所を安とすることもいふ又苟ごとくむ苟且草卒なり

いさめ　萬葉集古今集等にあり假初に義なりと見もいさくらと通ずる

なるべし卒尓也ともいさなる同

いさらみず　日本紀に水潦に字をよめり淺らなる義なるべし古昔に奇なる

泉門にいさらの小川に居るにまして　おもふ君ひとりなるを

いさぢら　潔をよめり勇ミ清しに義通ず　蠲をよむも蠲除して後潔清なるし

△いし　石をいふいは緒しいはくといふ日本紀に下津石根をいふに義とそ○竹木魚介皆よく化して石となり竹は松化石

宋書に柏化石稗史に竹化石なり○代醉編に陽泉在夫餘山北清流數十步源草木皆化為石精明堅勁其水所經之處物皆漬為石といひ一書に

いさやの西に一國に有二異泉不拘何物墜其内半月便生石皮周裹其物

とあり又歐邏巴の西國に一湖あり掛木于内入土一段化成鉄水中一段

化成石出水面方為原木也ともあり○石とあらはしとて寶亀七年仁和元年

及東遊に見えたり大石に我ひて碎け散らす事紙列也尾謙信に春日山

に城内に立しよりたぐぼうとあり○石と抱て淵に入るといふ説は二程全

書に譬抱石沈河とあり○潭氏化書に虎目光化石墜星化石松脂化伏苓と

いへり　さくさく紀人をよめりとに石なり彩もなりそねへさ

石をよめり○江列石山に石は湯紀石なり直なるは天下に奇巖なるも

や○雄畧に皇女に腹中有物如水と中有石といふ醫書に石瘕あり

○石を若て粮とする法ありて石羹といふ　○神

代紀に稚といしさはり口訣にいしも也といふ　ひとをかいうひとを言

ひとへ○如語に倚子ともいふ○東坡そすくはといふ　いしとも

いしは　石間はえいしはの事なるべし○史記に器不苦窳とゆゞみ
いしとかいすとあり鑄嶋はえやの文選に鬻良雑苦とかきて
よあるごとし
いしき　日本紀に石榔とよめり万葉集に石城とよめるを石棺を入
るゝなり人麻呂歌に隈こし附れば碧根を纏てとよめるこれなり
いしく　日本紀に不能毀果といしきはこれなり左氏傳に致果為毅と
見ゆいとじこれ略なるべし雲井春に関白太政いしく見給に寄りこれなる又管
仮右京大夫勝元いしくの人となれり膝とまでえそなれるとこれ今
昔物語に何につけてもいしかる物なりとかかるとこれなるべし
くもきりふいしくもはきまふをもとゆ撃字とよめるハ仮なるべし○今女児
乃河にうまれ紀事にいしくも美をつくす大平記北狂奇にいしかりしはハ夢窓に
くらいまれとよめるもあるべしとかそよめるこれ羽そ亟しきをいしくもよ
いしきご　石投れ者なりといひありいしなとよとそれこれ後名抄に掷石と
見ゆ和名抄に掷集り

石なごれ者の落ちるなりとなるふ色なる物日ハかりやとなる
○金葉集にいしあられ石合とよめる事をとゝせるとこれこれ法隆寺
の家ありいしあられ者なり○小児片張り小石をいしなとよぶ伊勢に石
名原にり奥列り石名坂あり
いしだし　後名抄に砧とあり聚石為歩渡と注せり新撰字鏡に磴又
砌ともあり方言集に石定と申り石橋ともゆ波洲に石と並べ置をいふなり
るなるとともるくとも注せり今いしあみとも云り石沼と書これと石並に義城
角に又いたゞいしをあとともよめり○石橋出相撲出と新勅撰に大原京祝
と戯ひ一変と氏よりふれ本平紀に石橋和義にあり
いしがき　出雲風土記に石神とこれ尾張に猪田郡石神と渭て石神とよめ仁明
紀に陸奥出玉造温泉石神式常陸國鹿嶋郡大洗磯前社の事文徳実録に
委くこれこれ又能登出羽咋郡大宮持像石神社又伊勢國鈴鹿郡の石神
社に石神社と今志やく大神といふ小社村の中にあるこれ百丈仮に奇巌あり
因幡出神御子石に事八嶽塩草に尾列城東物部神社に大石ともて

を上すなり又播州石生宮殿なり又姫社の神石生事蹟に紀よし金事よ
あるべきとふ石神社つまるべきよ新ひけるうさぬるこの
授神記よ豫章社載氏ら女病と一小石よ祈て復本社祠を建て神とし奉る
載侯祠と名ともえて真臘風土記よるふ社宮紀ハ一塊石をとりて奉る中
國社壇中社石社ともいひまた中山傳信録よ以石為神流酒祈福ともんさう
いしうら　万葉集よ夕禰間石ト以而と名ふさう即石神と埃裏鈔よ事神
乃祠よ元石と垂て石社祭事をとして事社を石凶とトもる事ふの今江列れ
いまさふ村の天波五神社祠よ石なり世よ霊異と称さう○景行紀よ石を一
蹶て点せるまるもまた石石とふへ○山槐記よ朱雀院鎮守石神流神ふさう
いちはう　称唯二字社よみをりかうちやうよりよりとこと御請社事なり世
俗流深抄よ称唯ハ来伏而投称唯と云ふとこと
いたやう　以上ハ中世下文社抄よ以下ハ事しハ宮長ふり今する文書あれハ
ふり賜り拙ハ先をそるんてそをとまるそ祈ふ書抄ふ社字事せしとこと
いしうらき　倭名抄よ膾をよりり日本紀よ抛をとみ又抛石とはしることとあら

是なり流義家奥列社役よ石弓と云ふも是なるへし平家物語ふ事ふもの
ふり異朝の砲車をいふ抛社打宋へしといて四聲字苑よ膾建大木置石其
上發機以投敵也ふんゆ
いしはたび　倭名抄よ紀伊石帯出雲石帯越石帯なとふ又有文光文玉
馬脳犀角社品ふり○顕文隠文といふ抄ふ源文八今いふ毛彫なり顕文ハ
の彫なりいふり○抄よ又白玉帯波斯馬脳帯班犀帯鳥犀帯散豆帯ふり
白詩よ通天白犀帯ともいふり又其骸有純方丸靴櫛上等之名ふんゆ
△いまづ　ふ社紀ふるあり ふ社紀の川八日本紀よふ
ふり大小之金鈴五十口天上ふり投流したまふの大田命紀よふんゆ
○古事記よ詔者此之鏡者専為我御魂而如拜吾前伊都岐奉次思金神
者取持前事為政此二柱神者拜祭佐久久斯侶伊須受能宮と云ふこと
殺と思金社二柱なるへしと思金祈社流式帳五部書をふもふこと云ふ
神語記神皇實録よ社と思兼命の相殿よまする事と云ふ
いすぐき　古事紀よ登而立走いすぐきと云ふこと云ふいハ後語ふすぐ家と

国立国会図書館　タイトル『和訓栞』　請求記号 837-48
ガラス使用

とり不覺也御のこゝかけて友と大殿祭祝詞よりめいまでゝとゝゆゝあと
夜女とゝゝゝ

たもいふといつりさるに伊勢も童浪(レキ)よりする由なりとそ名とはしらぬいせ
るゑまるとは言葉すゑ帰字をゑめり

いせ一海　顕昭紗に伊勢海とそ伊勢とゑ摩とひとつゑのむなりといつり
志摩ハとを伊勢ハ伊勢海とそ割しうゑるくゑうゑ摩ハ海ともいふ　古今
集りいせうゑとそのうり

いせとのいつま　伊勢ハ蜑ゑとの物語ゑへし　本朝集に伊勢とのゑとのあり
○本朝集に伊勢を潟とゑみしハ石列那賀郡長濱村ハ海より今い
せ島とゑ

△いそ　磯字とゑりいしハ磯ゑりとそ磯としとゑるみ石といそとゑるよ
み和名抄ゑ岩ゑ石ゑり字書に磯ハ水中積也とゑるうり魂い磯ゑよ
ゑり字書に磯ハ石貌といふとゑ和邦ゑ磯と云ゑ風土記ゑ勝宮の
磯ゑ湄又濆ゑ磯ゑり○倭姫世紀に玉掖(ヒロ)伊蘇宮とゑるゑ磯ハ掖編
よいつゑりおやひろいん貝や海ちんハ海ゑ磯ゑり○奇よいそゑるいそを用いそ
菜いそ綾いそ拂いそ貝ゑとゑ海りいそ菜いそ松いう貝ゑと一種の名ゑす

るゑ海人ハ海ハ事ハ海ゑりいそ松と称するものハ和布ハ形ゑり○琵琶ゑいそ
ゑいそ海りゑ又冠ゑりいそ

いそゑ　日本紀ゑ拳文選ゑ競ゑとゑ海ゑりいとゑ海ゑと色ゑすゑうゑふと同一方言ゑ
いそいくとゑふいくゑふ状拳ハ海ゑへし○再波ハ海ゑ石ゑ海ゑ海ゑり
いそぐ　急字ゑ海ゑりいハ綾語ゑ海ハ急ゑ日本紀の奇よいゑけといふハ及ハ
急ゑ海ゑ急ハ海ゑり霊異記ゑ疾ゑ海ゑ○いそぶまふとゑ海ゑ物語ハ古奇ゑ
ゑの、ふハ矢ゑ海ハ海ゑうゑくゑいうぶまうハ海ゑ海ゑ
いそし　日本紀ゑ勤字新撰字鏡ゑ仂字ゑとゑ海ゑり後日本紀ゑりいそし　み
ゑいそゑうゑいゑ海ゑ海ゑゑゑ今ゑいそくゑすゑゑ海ゑり天平楢原
東人ゑ賜ひし伊蘇志臣ハ姓ゑ因義ゑり○五十師原ハ伊勢ゑ方言集ゑ
山邊ハいそし御井ゑゑ山邊ハ海井ゑゑ鎮坐本記ゑ山邊行宮今
号一志郡新家(ニヒヤ)村是也ゑ今新家村ハ社ゑ天王ゑ称ゑ古宮ゑ号ハ外宮
三所ハ海ハ海ゑりゑ社ハ西宮ゑゑ外ゑり當時ハ白田ゑなりゑ又鈴鹿郡
山邊村ゑ古井存ゑり是式ゑ所謂大井神社ゑして今河曲郡ゑ属ゑ神風

拙ゝも鈴鹿郡山部御厨河曲郡山邊御厨とあり文本集よりそれ活字とあるも見なり右の如き活字をもて禁裏より毎年試筆に硯あるとこゝふ活字をこびとりとぞいひもと古活字なり十九いとゝみていそこゝふまず師ハ鈴に誤りて長守も山邊に誤れり十鈴に誤れるなるへしとも也とあり攝列依羅に社よ示る五十師命も師ハ師に誤りて五十猛命なるへしとも也

いそなる　倭名抄伊豫國北宇和郡の名に竿井とあり今此姓に或ハ竿井ゝ作りぬいもぬの誤なるも名考に竿井にかゝれたるも也と源氏にかゝる

いそゝ　五十年とあり又磯路に家あり○正數にいはゝ千といそゝあり五十九王といそゝあり五十九王ハ五十猛ひとしとも也

いそふり　古語日記に奇よりて相模風土記に鎌倉郡見越埼毎有速浪崩石國人名号伊曾布利所謂振石也とあり

いそかし　開とあり〇ぎくとあり〇ぎくとあり〇ぎくとあり武急乃意なり仁明天皇實筭に加賀欲に世中のいとかし〇ぎくとあり武備志に無工夫の三字を譯まり正譯ハひまなり工夫ハ反語にひまなる事

困り童蒙頌韻に忽といそがつとあり〇ひも同し或ハ忙とあり

いそなみや　後撰集にあり日本紀に磯宮とあり伊勢に齋宮なるうしし

神名秘書に即宇治に機殿なりとあり倭姫世記に從飯野高宮遷幸伊蘇宮とあるハ和名抄に度會郡に伊蘇と見る是なりとあり神名或に伊蘇上神社とあり多氣郡に神名秘書裡に伊蘇宮並麻村宮古名とあり

いそはとゝ　神代紀に石上とあり又いとかとゝもみゆ布留神社ハ石上振之神相とあり〇ぎくとあり〇ぎくとあり〇ぎくとあり零とも或ハ雨とあり

集に石の先に沸れ出たるなるハ花を見るもの也とあり○宣賢に活字にいハ

諸昔時舊に敷なるとあり沸に活字にいハ

△いた　板とあり〇ぎくとあり〇ぎくとあり〇ぎくとあり樽板普板なり

いたる　至臻度到造詣適近弔格屆等とあり往足に臻ハ聚也戻ハ止也到ハ到底造ハ進也迄ハ及也吊ハ精至也格ハ窮至又假とあり音格とあり〇ぎくとあり〇ぎくとあり霊異記に達とあり又詩に活字に之を至也とあり

いたと　致字とあり至らんの略なるべし使至の家字り○俗語よりハ為字とさ
いだく　懐抱とかいふ字なりよて考よだくとはいとりて日本紀よハむづくとも
うづくともよりて行ひ抱ハいづかへて又信よだくへるとふかふ反く
みてだくと同し○霊異記よハ抱をねぶづくと書り
いたむ　疼痛とかふ字をたむる此字如へし神代紀よ傷又哀傷又悽然をとのみ
霊異記よ軫とかみ新撰字鏡よ怏又悒とかり○奇よいとくとかふハ痛切
此字又あるかちれとも漢食貨志よ痛と甚と訓をとて万葉集よ甚
字又極大とかり西土よも痛快痛飲等とかとり○諺よハかとハ
いふ万葉集よいとくとかとくくとかくくとかとくとかとくとかと

ものを西生よりいふ光掘ことより

いくでさ　新撰字鏡に顛頂とよめり至高なるべし○顛とゐむもと

頂とと通ずる倭名抄に字鏡に岌峩もよめり○天武紀に蓋とゐまり

いさがひ　櫪とよめり板飼なるべし儀式帳に板立御馬ともみえたり老驥伏櫪

志在千里ともいふもあり倭名抄に櫪ともさいとゐまり櫪飼繫飼放飼ともいふあるあり又勞飼とゐ事東鑑に見えたり兵範記に櫪御馬勞飼館ともみえ

いくやぐし　日本紀に流矢とよめり古事記に痛矢串と書りあり

痛棒とゐあり

いたづがハし　煩とよめりハ及ひかひ及さを通ずるなり同

いくでさちひ　紫式部日記に常花物語に正月戴

餅及五歳まで沙汰し侍ることゐり古事記に安騎野に基明嬰兒之御正

月戴餅之間とゐ紀に入道祝言才學若狭父文章若狭父と記紀に民間

九日以片糕搭小兒頭上乳母祝云百事皆當とゐり酏餅に小豆に煮

うるをうゝ置うるをかいうゝうと称を

△いちり　市とゐ五十路に見えべし万葉集に八十衢とゐるをゝ又つくえい

商に見とゐり市場ともいふ○座頭の名に都字とゐるも義同○

神前に神楽をする女をいちといふいつきに見るやつき及ち也伊勢に齋宮賀

茂に齋院春日に齋女とゐるも古紀にまゐこう字結文に古へ女祢宜と

いふものをいふ貞観官制に祢宜祝並置社者以女為祢宜とゐ

また女祝ともみえたり式に見えたる○一の谷に搦手にあり城に平宗

盛に築く所慶長三年に城陷とゐり

いちぐら　倭名抄に肆と訓り市倉に見えたる店も廛も同し

いつくしや　日本紀に嚴忌とゐり源氏物語にいつくしき世又后に浄御原

くしとゐひ大和物語に平仲かくかすなりに女を妻に許よとゐて妻にとり

に妻いちくしやくいひなれハ近くなよえよりでといふ見えり○喜撰式に若

詠民時ちくしと紀に云くしくしくしハ民祐神也といふ成べし○詩に捷々と

いちくしやくしとゐり紀に伊勢物語にいちくしやびをゐんをけとゐり

唯給ふてさとし紀等に用ゐたり

ちとやび　祝詞式に御心一速比給ふてさとしたまひ嚴れ霊一れ

字は假借し倭姫世記にちとやぬるとゐづちとやぬるとゐづ

ちとやぶるとゐ

いちはひと　今俗ふ一人に師範たるを天子を一人とするなり○一れ人

といふは第一れ人なり摂關をも一座れ宣旨を蒙りたまふなり天慶四年

ちとせの藤忠平賜二上宣旨一とかくこれなり又一れ人は左右れ称なり

いちれみや　寛喜元年に諸列れ一宮記れ作れり○伊勢

れ一宮は一宮記に猿田彦大神とし河曲郡都波岐神社とたてしより法

書皆もとより神風抄には三重郡に椿御園ゆゑと今鈴鹿郡椿大神社を

山中村にまもり所祭猿田彦神相殿瓊々杵尊栲幡千々姫命也因て椿

大夫宮中変れ邪に由法ありといふ○二宮れ称を一宮とたるなるべし

○氏姓に一宮二宮ともよしより

いちだち　著字とも先り最白され霊りいちだちくとゆゆ

宗なり又掲焉ともあり掲焉も同

△いつ　多多羅り何時とゐみ草家多多れ幾とよ先りれとゐ多も同

古今集り行くへとゐるもいつとありはとそくるものあり○いつとあもいな

いつ信濃りの俗語なり俗捨集り

はとひとり人もまけ世中をいつとゐれともすくをなるこそ

いづ　出とゐ先り信濃にもいづれいづれ物なり○沢は今出れ霊だるなづ

なり○袋草子れ有よいづらふともいづらふなるべし○神代紀に稜威とゐみ皇

代紀に嚴とゐ先り氣出れ霊なり一説に稜威此云伊都と古事記に

も稜威は伊都とたり武甕槌神紀に此云怡途とたて

古事記も伊豆と書て伊都とかくべし都は清音にゐみ途は濁音に

ゐみて健き事とゐふ稜威の伊都と清き事とゐふ嚴重れ伊豆とは別言

なりとゐり祝詞には伊都も伊豆ともひとつに書り○伊豆れ霊も相模駿河

乃海南に出る山地なりとて名く海と○伊豆権現を天忍穂耳尊栲幡

千々姫命を祭るとゐふ加茂郡に海しまず社れ右れ方あづまれ書て續後撰

第り 綱曳社神社ともいふ ○鎌倉社代は箱根社と並へ祭る
て是を二所権現といひ勢約はいとゝ多く載る一説には箱根社神は天忍
穂耳尊と称り綱曳は先陽く杵尊と竜湯権現ともいひ伝ふ
いつゝ 早晩ゝ 綱紀宣命にいつゝも同し 万葉集に何時ともよみ
て遠と訳しその時々又常とひくていふ 勢語にいつれる水とよむも同し
いづも 日本紀に出雲とよみ 何時もとも何ぞ 何畤 熟も同し 又熟與二
字ともに見はとりかへてよめり 熟若し同し 菅家萬葉には写もよめり
いて 五十とゝ 忌土社 忌とは忌はゝ 忌部 忌部 十部社
中とわひてあるはとつと 又十数五 十数五 十とつゝ 十とかゝ 絶く
十とつゝ ゝとゝ
いつく 齋といふ忌とゝ 忌社 齋宮 齋部 齋宮 齋部 齋宮 齋部

[illegible]日永嶽武刻高尾山[illegible]祀[illegible]吉尾天[illegible]邪法[illegible]
秋葉山三尺坊[illegible]祠も百年以前[illegible]
[illegible]宋史[illegible]狐王朝[illegible]
院殿[illegible]大[illegible]
[illegible]狐[illegible]
康富記[illegible]室町殿醫師高天被禁獄父子三人也此者仕狐之沙汰風聞[illegible]
[illegible]谷響集[illegible]茶吉尾有二謂實類與漫茶羅衆實類茶吉尾名噉食
人心雖業通自在祭者得福名為邪法漫茶羅中茶吉尾者如來應迹故噉
盡心垢住大涅槃所以名乘如天龍八部皆此義也[illegible]文德實錄[illegible]
席田郡有妖巫其靈轉行噉心一種滋蔓民被毒害[illegible]茶吉尾の邪術[illegible]
いづも　國名[illegible]出雲ハ[illegible]
乃祢[illegible]
[illegible]
いけ[illegible]　虛偽[illegible]何時晴[illegible]

同義なり[illegible]
[illegible]
[illegible]紙[illegible]
新撰字鏡[illegible]譚も譚も譚[illegible]
[illegible]○[illegible]
いつ[illegible]　何時[illegible]
延喜式[illegible]越前敦賀郡加比留神社五幡神社[illegible]
[illegible]
いつ[illegible]　春日[illegible]齋女[illegible]三代[illegible]
いけ[illegible]　五緒[illegible]
[illegible]五緒車[illegible]
いづ[illegible]　出入[illegible]
[illegible]音[illegible]
[illegible]○[illegible]京[illegible]
[illegible]延喜式[illegible]入渤海使入新羅使[illegible]

ところも涉なる所〻遣唐ハうしとおもう

いづくんぞ　烏悪安烏寧奚奈胡爭〻とよめりいづくんぞ

恐し小爾雅ニ悪乎ハ於何也とあるごとく悪ハ平聲烏と通用す

いつくしき　大殿祭祝詞ニ伊豆都志仮事先久とあり伊ハ発語つくしき記ニ

なるべし万葉集ニつくしとおもうこころさうなり

いつくしむ　仁徳紀ニ痛く惜むの条なべて人の全徳ハ仁恵に如ものなり万

葉集ニ愛をつくしとよめるも音を重ねたり○霊異記ニ儼然をいつくし

ひとよめり万葉集ニ宮殿ハいつくしきかとあり

いつきたてまつる　齋宮ニ倭姫命ニ始まりそれをとハ内宮に奉ることなり

景行天皇紀ニ代ニ氣宮と作りて内宮野皇女まし坐せりそれより七十五

代ニ成る故宮をたまひて後多神院に皇女ニ肅子内親王に坐ハ断絶をそう中

ニ度舎小事之女宮子ハ皇女ニ非ずして内親王称し宣下ありて先例ニ倣ふと正史ハ

世事ニ今其舊跡ニ故宮村と云所に表とあるも今ハ現在なり○初め齋居ありて

第三年其三年ニ当る九月上旬ニ二日ヒト伊勢齋宮ニ入奉ること十日

日ナる社神嘗祭ニ日始て法奉ることより祝詞式ニ齋内親王奉入

時進神嘗幣詞とあるごとく聖武紀ニ立神楯於齋宮二門とあるごとくハ大嘗

祭ニ用ゆる楯を指ス歟也ハ○賀茂社齋院も亦ハいつきたてまつる

ことなり○百官於合社判ニ云ごとく清寂天皇弘仁元年置齋院司以皇

女有知内親王為齋王とあるごとく和名抄ニ野辯我ニ齋院司いつきたてまつる

さとあり○こもゝ所つの朝三十四世社齋院繕子内親王社後断絶すと後ハ大

内社初齋院ニて三年潔齋して年社宮ニ入ると後ハ社ニ参りたまうんとて御禊あり

て紫野社ニ参ることハ中酉日祭ニ従ひたまふなり

いつきわらハ　齋童ニ経宮社をべて社神事ニ役ずが若社者ニ男まくとよりて

いつきむすめ　源氏ニ伊勢ニ参りきぬあやぬのよ浅くそめいそひろと

うめるよ同じくとあり

いつかさひ　五重と重り倶ニ綾ニて東ハ承絹社紀ニ女官錦ハよ内侍ニ

さきかくいとも八も十も附ようてかさひ号今社人ハ冠ハ烏帽子ニ

ものぬぎ紙ニ云ごとく十二單ニ五衣ともいふなり

多なりもたり又ひとつ〳〵とうをとるもあるなり○七つをぬといふもつんとうり
いつれもを　五れ文字れ変なり上西門院の令婦ゑ方ありぬるとそ
弁局
人れをいつれもをれ添さてもたもうけをつよかさうとりぬる
をよみ給る可伝西れ日記より弁局ハ伝西れ女なり周徳れ注疏ゑ婦人
倫五徳以此為貞婦をれ五ハ清貞美譜胎れ婦法をいふとんを世ゑ如るを
ゑ文字と称をるもひ変なるゝ後宮名目ゑ也り
いつともれをみ　五経をいふ日本紀竟宴等ゑ得段楊爾
いをとものみをむ人ハたゑやうゑをとひをとそをよれりとる
ゑれ白ハ五経博士段楊爾をよみ上れ句ハよみ人れ姓名をたちハをとり
惟宗朝臣具範なり
いつくをれたるつをの　神代紀ゑ五穀をとのり五種れ稙つ和れ変なり○
五穀と稲粟稗麥豆と定めたまひしハ天照大神れ制なり豆をとハ今
素問周禮注谷梁傳注楚辞注孟子注ゑ名異なりて一定せをとをと稗ハ收

入と孟子ゑも五穀も稗ゑをるをとり古事紀ゑハ稲粟小豆麥大豆とをゑ
△いて　延喜式ゑ射手とをり西土そ弓手といふ也なり
いで　日本紀ゑ壓乞字ゑ基ゑ乞字欲得字なりとをりれをとうをとを
枕草紙ゑもいでなりとをゑ中とををとり
いでや　発語の詞ゑいとり日本紀ゑ咄哉字万葉集ゑ先字をををり古今
集ゑいで人ハこをれをそをゑを又いで彩と人をゑめをとをめをも同一
いでは　和名抄ゑ見物出雲国ゑ今でハを呼り神名或ゑ田川郡ゑ伊底波
神社あり姓氏録ゑ出雲臣なり古名ゑ名ゑ又蒙羽を出雲ゑうれ名なるゑ
神社ハ今所謂金峯山をして出雲れ池なり
いでます　日本紀ゑ出行ををみ又所幸又幸を訓せり万葉集ゑ御
駕をとををうれり出坐れ変なり○紀をゑ
たゑ反ちるゑと二四通りてをるハちををれ変り
何來之晩也をゑをれををくいでまし
なをいをも古紀をれをゆ

いでにしとき　遊魂く和名式部式に有るあくがれ出しまとうの伊勢物語に
思ひのまゝ出ふ　ものいろやうん　氣海く乃こゝ魂結ひせよ
魂は出ぬると結ひとゞむる事ハ右備公の作こゝ公ぬと陰陽乃れと法こゝ
玉ハこゝのおと三ゑ通ーそやがへは一まを結ふとゝり委巷叢談に諱忌語
而為俏語者無言黙坐曰出神墨莊漫錄に范文正公長子監簿純祐自幼
警敏明悟過人文正公所料事必先知之善能出神公在西邊凡虜情機事
皆預逆知蓋出神至虜廷故公每制勝料敵如神者監簿之力也一日因出
神為人所驚自此神觀不足未幾而亡とゝ又たの初ゝこゝへのやに乃ゆ
△いと　辞に云ハ日本紀に最字に方糸糸に甚字痛字なとゝ多ありいとく
といふに同ー○糸ハ五は糸なるへーと云と通を統文は法に一蚕所吐為
忽糸五忽也と也り○大頭は糸とゝ故事今昔物語に乃て文治中参河
国より献ずるく神風抄に尾張国に採代糸といふも乃て赤曳糸とゝ云り
○今緑児は糸いとゝ稚字は糸古ゝ詞も第式部日記に糸いと
ひめ糸とゝ云ー○いとは法花経に糸は法花経に糸ハ伊賀名張郡に川ハ伊賀名張郡に

源雅通
年は法のゝ糸く私のゝ糸けやおゝ糸に糸ゝ川は糸
いとゞ　方糸糸に彌字に糸に方とゝ見ハ糸とゝ見へしゝゞは法糸糸
糸に糸ゝゝゞいとゞいとゞは略なるへー伊勢物語に糸ゝゞは法糸
選に専もあり○信に情婦といとゞとゝ云り○塞表紀に伊賀は事を紀ー
て長田は糸とは糸は糸とゝ和とまり糸ていとゞは大伴糸乃沼糸に糸ゝ　射
手とも糸ていとゞとやすとゝ云ゝとゝ和無る里は芸に名和あり
いとゝ　厭字にあり糸ゝゝ乃物なる河あるへー○信に分といふ骨といふ
骨ゝいゝゝゝ方へしなる女ゝ
ゝいとゝは糸は糸ゝ云ハ最晴ゝ方厭字は法へゝ
いとま　暇字にあり出るは糸へー外に出は休暇あり今義解ゝ
依私事而罷退為假とゝゝ云ゝ假も暇に云り○暇に今に暇といふ法
いと荒ゝゝ所謂父母服一年暇五十日は新ゝ伊勢は遠闇時といと
法は糸ゝ別に乏ゝ○信に婦と云るといふ法とゝ休暇は糸ゝ暇の

ばと樂善錄ゑ離出と云ふ離別と称するまさるべし

いとこ　從父兄弟といふ出子は父をひと出といふは左傳ゑんこうゑ又系ゑ

さるめさむつびとりいる羽ゑへ優名抄ゑ再從兄弟とやいとこ云

兄弟をまくいとこ　あり○日本紀の所ようゑ人ハ淡人どちやいとこハ

もいとこちとゑ先ゑ見ハ同事といふやゑ從父兄弟とさ差て西土は爭

ゑ相伯仲をと云ふこと○古事紀の所よいとこはくいるもいとこ

さみは兄弟系系よいとこ為は君と臣ゑ御お訳辨也

いとこ　勞いしと為す結ゑ略して　いとこ　とも云り俗粗は所ゑ

年ふるけがしきみそう流ぎまくぬまこ泥ぬいこ海の外や

續紀宣命よいとこみ　もんこう○日本紀ゑ哀不忍聽といとほしが

ゑ　こうゑりいろくいるは兄くいる反うくさ名伊勢物語ゑ哀惜と事る

を憐ゑ○全術兵制ゑ心肘といとしと譯ゑ

いとこのむ　新撰字源ゑ嘗字をつくりいとこのむ　痛嘗は哀ゑへ

日本紀ゑ乾くをゑ

いとゆふ　糸帛は兄ゑまさをけよいとゆふ　ゆふ　ゆふ　ゆふ　ゆふ　ゆふ　ゆふ　ゆふ　ゆふ　ゆふ

こんこう○遊絲といふ　ゆふ　ゆふ　ゆふ　ゆふ　ゆふ　ゆふ　ゆふ　ゆふ　ゆふ　ゆふ

ゆふ　ゆふ　ゆふ　ゆふ　ゆふ　ゆふ　ゆふ　ゆふ　ゆふ　ゆふ　ゆふ　ゆふ　ゆふ　ゆふ　ゆふ

いとこと　糸竹は管法と云り絲竹管弦といふ重複と云ふも陸賈

新語ゑ見こうゑ○管弦ゑ　ゆふ　ゆふ　ゆふ　ゆふ　ゆふ　ゆふ　ゆふ　ゆふ　ゆふ　ゆふ　ゆふ　ゆふ　ゆふ　ゆふ　ゆふ

見と四海といふ　村上帝紀ゑ　ゆふ　ゆふ　ゆふ　ゆふ　ゆふ　ゆふ　ゆふ　ゆふ　ゆふ　ゆふ　ゆふ　ゆふ　ゆふ　ゆふ　ゆふ

いとけなし　幼稚といふいとけなしとも云り今いふいとけなしと助辭

羽ゑ又先言解は兄ゑ拘海ゑ　ゆふ　ゆふ　ゆふ　ゆふ　ゆふ　ゆふ　ゆふ　ゆふ　ゆふ　ゆふ　ゆふ　ゆふ　ゆふ　ゆふ　ゆふ

△いな　否とゑ先り然の反と古字ハ否と俗語ゑいんまと云り神代紀ゑ不

須也とゑみ方系第ゑ不言不聽不欲なしとゑみ出名伊勢物語ゑ不

知とゑめふも兄同しいなとも云り又弗とゑり韵會ゑ不可也と為

○鯔はいなと云ふ擬尾と云り張辺のいなぶと云ものれを名と

すゑ至て小さとすぐとゑ塩嚢物ゑ鰯とゑみ俗ゑ鰯字と造り

ゑめりたての義と云ふ名と云り土左ゑ　ゆふ　ゆふ　ゆふ　ゆふ　ゆふ　ゆふ　ゆふ　ゆふ　ゆふ　ゆふ　ゆふ　ゆふ　ゆふ　ゆふ　ゆふ

いなび　日本紀の辞字謝字遊仙窟の推辞字などにもいなびとも書ぶ
里人ひといなびいなむしともいふ或は間言とも云
いなり　神代紀の保食神の腹中に生稲と云て稲穀と
事の据はしとはあるとしるし加へ一に曰と曰す樺井と古事記に
苅羽井と云て云々一説の山の地名に神と荷田の神といふ説り
倉稲魂を祭ともいふ云々文徳実録の稲荷神三柱と云々本殿は
倉稲魂第二殿は須佐之男命第三殿は大市比賣也と俗説○古記の稲穀
の二階祭と云ふ若東寺の傍の二階長者なりと云ふ神輿を振ることと
なりて神供を献せり例なり今も東寺にて神供を奉ることなり○雲
乃いなりとて云々は雲乃なりて稲の成りたるなり又神代紀天然人の説
事なり○鍛工の稲荷と称ふは菅三條古鍛冶宗近の山の埴土を
て鑄鎔をなして頻に神拝もなるより此事なり又小
鍛冶といふ説は狐と魂とを相撓と相ふとも云ふ○稲荷信
心は壹演僧正と鞍馬僧正合も同し○伊勢太電藝歌に稲生村なり

式に伊奈富神社と云て孰社祭に四至と詳に記せり保食神と称
いなり○正一位稲生大明神の古額を蔵む背に文永十一年正三位藤原
朝臣経朝とみゆ○姓に呼ハ古事記に稲生年次なり
いなぐ　因幡は古事記に稲羽に作り法興寺に郷名にも稲羽に作る○
稲葉は稲穀なり奇多○稲葉は日本紀に出雲の新墾之十握
稲之穂と云て云々後拾遺に田は刈ほしてあり稲葉
は波の稲葉の風に並て云々○稲穂は花出穂乃波皇に百人一首
に云て云々因幡は稲の名近き方に云て云々○俗に云ふ稲
場は穀なり
いなぎ　日本紀に稲城と云て云々以稲造城と云て云々京を制わくし○
稲置は古へ公田は御倉所なり又邑長は号ふて俗に姓にも称の名ふもの
なり允恭紀に闘鶏國造は姓と貶して稲置とかきて事云々○三
才圖會に麥苑とも云て稲穂とも云ふ日出国なり
なることなり○伊勢参宮通は稲本は多乳なり大樣神社まして大稲

興命と祀るごし及ざる状稲本八稲興と同し櫛も興と音通すと云り
稲本川とも云へり　ひそかあるこりと祓れ表あるこりと延喜齋宮式に五月
十月晦日随近川頭為禊と見えたる是なり
いなせ　いなせの音伝なり　いなせ二つなりいなハ稚と云ハ諸とあ
て万葉集に　いなもせとも見えたり　紀神代巻第五おやけまとりけるかとあるも
せともいひたるてゝやけ云
いなせともひとあたますり紀神代巻とかもせぬせなりあり
○日本紀に座請とあり是ハ是もいふかし　又使者稲背脛といふ名義
も此義なるかや
いなぐさ　神代紀に髻鬘をみなぐさとあり　万葉集に
なぐさとあるもこれなり　新撰字鏡に髻をいなぐさとあり　たなぐす
いなもめ　万葉集に　ゆくとゆく布稲用こきしのこと　暁れ
ぬをとり日本紀に稲目連あり　一説に寝目なるいを寝る目は覚る
と今も見れ用とあり

いなゝく　倭名鈔に嘶とあり玉篇に馬鳴也と見えたり　万葉集に
馬聲とあり　紀神代巻に新撰字鏡に嘶とあり
いなびかり　電とあり稲光なり　山中の巌石に紀伊熱閃とあり
いなゞ○いなづまもいなに稲妻の義なり　又いなづるびともいふ日本紀に倭名抄に
見えたり稲交の義なり　雷雨を得て稲の胎むなり　万葉集に
もとゝ義見えたり
いなかぜ　倭名抄に稲負鳥とあり　菅家萬葉集に
さゝ課字あり　いなかぜ時とあり稲を刈れ節とあり　万葉集に
かりもひもの八万葉集にあり　新撰二字彙に　堀河院初
度百首に公実に見えたれ　馬とあり　神代口訣に
なりとあり　和名抄に
逢坂と稲荷おとるは教へとあり
倭名抄に別に筆とあり　彩雲
秋は田のいなを刈るとあるは稲を刈るなり

[illegible]

何[illegible]

幸くして[illegible]

△いよ　性[illegible]

いかへ　古[illegible]

[illegible]

いかへの[illegible]

△いぬ　[illegible]

[illegible]

風俗通に狗別賞主善守禦[illegible]

[illegible]日年紀万[illegible]

[illegible]十日[illegible]今[illegible]

[illegible]

いぬ[illegible]

新撰字鏡に狗とあり○[illegible]

[illegible]

[illegible]

いぬがみ　[illegible]

狐蠱あり狐を役して人を害す犬蠱と捜神記に[illegible]雲列[illegible]

[illegible]

[illegible]

絶交を絶つ又清[illegible]

[illegible]蛇蠱牛鬼猫鬼[illegible]

使[illegible]元亨釋書恵勝傳に[illegible]

寺[illegible]

却せんとすれ[illegible]

めそれ[illegible]

いぬがり　禁秘抄に[illegible]

[illegible]

大迫物ハ是を写す射法と也り
いぬおうもの　弓道より出り来る迫より大迫物とうてこうを稜近法院此所より
て物ゝと也り古へ半ゝを用う義なり後右此弱射ありとも也り武家ゝを
小笠原此家ゝ礼式を司り也り此しら故ありて法法家ゝ執り八重
貞享元年ゝ法法三郎ゝ命せられ東海ゝ道ゝ入り為軍勢法附し
いぬおうたきゝ人　俗名抜ゝ大心ゝ也ゝ故ゝ法ゝ日本紀ゝ支吐ゝ也ゝ
ゝ訓ゝ

△いね　稲ゝ也ゝ伝根の義なるべし也ゝ也ゝ也ゝ法法書ゝ日本嘉
ゝ穀物理論ゝ稲者概種之總称ゝ也ゝ爾雅翼ゝ稲米粒如霜性尤宜水
一名稌而有黏有不黏今人以黏為稉不黏為秔ゝ也ゝ秔ゝ也ゝ
○史ゝ類稲ゝ也ゝ又延暦十三年云ゝ國内有秉稲四万六千一束其下ゝ國史
ゝ引乗官物ゝ也ゝ稲ゝ穀稲ゝ剰稲ゝ官ゝ剰物ゝ也ゝ○後名抜ゝ稌ゝ也ゝ
ゝ稲ゝ義ゝ実ゝ稲ゝ義ゝ○たいゝ稲ゝ也ゝ
也ゝ穀筒ゝ魏武帝得紅稲於古城國ゝ也ゝ○本稲ゝ也ゝ

稲ゝ也ゝ正税公廨ゝ名ゝ也ゝ志摩國ゝ田何ゝ也ゝ正粮ゝ也ゝ
ゝ救急料ゝ也ゝ法ゝ又本類雑頴ゝ也ゝ又雑稲ゝ訳ゝ
ゝ日本紀万葉集ゝ寐ゝ也ゝ
ゝ稲ゝ也ゝ稲稜ゝ也ゝ又
ゝ稲ゝ穀ゝ也ゝ○神代紀ゝ適字ゝ也ゝ
ゝ同ゝ稲ゝ寿ゝ也ゝ

△いのち　命ゝ也ゝ氣内ゝ也ゝ大事ゝ息出入名為壽命一息不還即
為命終ゝ也ゝ○後漢第穆傳ゝ情為恩使命緣義軽ゝ也ゝ運ゝ天ゝ
命ゝ義ゝ也ゝ○ゝ也ゝ
ゝ也ゝ命脉ゝ也ゝ
ゝ也ゝ

いのち　行法ゝ也ゝ忌宣ゝ也ゝ新撰字鏡ゝ訛文註ゝ也ゝ
忌々敬む之謂ゝ也ゝ

△いそ　磐又磐石ゝ也ゝ石ゝ也ゝ
ゝ石ゝ也ゝ○今伊勢ゝ也ゝ

なべてそれをもとのまことにいう○小綱よりいそしうかも重石（オモシ）ひろ大網こそ直る網石
といひそいそも石れ家ぬへ〜今後と有うるを石と用うす所よりそれおろをなと
よあり岩やいかもいかり○今分岩と岩すとゆ綾八注書よ本廣出獵見草
中石以為虎也射之中没鏃視之石也といかわ〜
いとか　神代紀よ石倭名鈔よ巖とあり美系集よ石穂とあるとうかハ
秀出れさ彩撥字鏡よ礪とあり○いそかろもそうろハ助れ語
○代とあるあつうそかと所よあるハ天人の羽衣とて岩石とあるとらすと
岩石一切というる梵書よんてうう
いとさ　石本之方系集よ石とうり小れいそれいるぬとい云文集れ人淑木
石都有情れさかり○系系集よ石墓もあり○近江尾張名とに岩木
という物あり石炭也木化石れ柔らうるあ物ぬそれ岩よ紙〜紙系とそ
ぞとも岩り○彩ゆ載集よいそれぬとあるハ張河と岩木島ハ伊與よ行り
いとみ　石見と書り山宗よる角山岩海山宗ハ張山宗と皆嶮石れ山あると
ぬそ名とすと岩り又西系九州乃紙よ石見れ海のあるさとよること名氏

ぬつと孤れ巖そそぐ〜ぬつうう行ぬつ行ぬハ系系ようるあや系れ浦の
行うりけよ系と岩ぬうあさ岩りうあり○石見の川ハ那賀郡に津れ川とあ
石見海も風と紀よ一所れ名とす徐慶郡行記
いとく　日字とあるとくあ系○佐倍よいそれありとあるといとくとあ系
○言云謂道称皆同〜
いとれ　日本紀よ賛余とあり古事記よ伊波禮毘古ハ十市郡の地
名あるとふあれ寄さ行るとそれ余字とあるとれとあるむハ後寄
石村（イハレ）と書るも系同〜石寸と書るハ事林廣記よ村曰寸れさ〜〜元亨
釋書釋仁耀姓石寸氏とあると青そそ系ハ非〜○謂とあるむハ字注れ行り
事有可称曰有謂失事宜不可名言謂亡謂とんてうるけれるさ書く○
今俗因由といそれという
いとく　日本紀万葉集よあり〜ハ後宿禰れ系〜○いそひ注ハ因注よ行り
いとふ　祝字とあり日本紀よ系字万葉集よ鎮齋とあり〜ハ〜〜
因幡国風土記よ字とあるうそ紙と系あるうり小て居とやあ代といとふる出と長さ

けたを用ることもなかりそ稚き事をいふなり○神代紀に齋主神(イハヒヌシ)見元伊
勢物語に古代もとゝ人はいとなかりけり齋宮記に
いとゆ　後拾遺に嘶とゝもありいとゆえたゝ馬聲といと
ゝ　万葉集に見えたり
いとんや　況字類字苑にあり言ん平れば言に及ぶるといふなり
てゝ譯に詳校篇海に況と益也と注する
いとむら　神代紀に磐石をもあり新れむかるゝて古事記に石村と見えたり
いとあこ　万葉集に石根と書て石橋なれば石を並べて注するなり
いとひべ　万葉集に家神のさまをいふ吾屋に御諸(ミモロ)を立て地を齋戸(イハヒ)
と居と見て又忌戸(イハヒヘ)と齋ありと見えたり崇神紀に忌瓮(イハヒヘ)を用ひ神酒を瓮
なり今も神祭りに遺趾又陵墓にもとり山器を掘得ること多し口廣く底ま
ろくてまわずを蓋しいと地に鑿居(カリスエ)とあるものなり
いとくし　石橋と万葉集に見えゆ久米記に磐梯山をいはゝ

一つの磐石と河内の平岩村乃山にあるも石橋なり万葉
集にあふ川に石と並べ並べて渡るとあり石を石(イハシ)ともいふ拾遺集に
いとしけ　見れども見れども飽かぬ意なり
見ハ小説に役君小角石橋と葛城山に架し神を役使し神形のみにく
きを恥て彩色を加へ小角成功の後に橋を壞て彩色を懸て一云に神を縛せりと
ありと後日本紀に小角鬼神を役使せりと一言主神にて云ふ
すべ石橋は本に秦始皇の故事にて三齊略記に一云に神ハ役使せ
ら新鬼に八行ふすべ従は人を齋ふと云ふ新撰字鏡に
いとつぶ　岩壺は家日本紀に石穴を云ふ岩をかうがちて壺とする
なり新撰字鏡
　　　

山代岩清水の社を国社清水といふも是なり○岩清水八幡社神名帳に載さ
ふ々行教宇佐より勧請し三代実録に水尾の八幡を護国寺とゝなえ
大安寺縁起文に行教和尚以其神衣鎮于此以為石清水寺伽藍神隷于
和列大安寺八幡とゐるこゝろなるべしとゝ微くなりしを源義家ゐ源氏
なめり崇敬せられして當社を如くハ尊ゐ敬ハ武門宿祢社
なり○此附の祭ハ安和年中より始る古語り
世俗人ハ何とも石を川もみかるゝ神をゐ
いとゞ〻し歟　万葉集に石を上とゐ
なゞ同じゐみ如へ〻波海と波を海ゐ波を波ゐ波ゐ波ゐ

ゝみゝ又聞とゝめりみとゝされいいハ入れ物ゝや又袋俗ゝや○天平十四年
丁京師往ゝ雨飯とゝんゆ

いひさ　新撰字鏡ゝ鼾とゝめり息引れ物ゝ源氏物語ゝいびきゝ国志
らぬ音とゝんゝゝり或ハ鼾鼾とゝめれと鼾ハ鼾れ法ゝ〻〻鼾字ハ所見ゝ

いびつ　陸圓ゝいゝ飯櫃れ形ゝり如ゝる詞ゝゝ〻〻飯びつハ郷談正音ゝ飯櫃
とゝんゝ飯砵れ字も同書ゝゝんゝゝり又ゝ字とゝめり易京房傳ゝゝ屈也とゝんゝ

いひぐ　京事記ゝ飯粒とゝめりれハつぶれ物ゝ貝本紀三代実録延喜式
なゝゝに粒れ一字とゝめり列子ゝ割粒為餌とゝんゝゝり○倭名抄ゝ
胝目と訓ゝり新撰字鏡ゝ疣とゝめり飯粒ゝ物ゝゝゆゝゝ今俗い
ぐゝゝゝ疣瘡と訓ゝ〻〻〻

朱子語類ニ謂之名之也之謂、直為也といふり○揖は音ユウ節會ニ曲折はいかと云事ゆり進退曲折の時の揖なり

いぶて　神代紀ニ安忍字とかめり仏ばくかくけあることいふ廣韻ニ忍安不仁曰忍とあり俗ニすまうる氣なれ人ものいふもこをいぶりはなへ

いふき　神代紀ニ氣噴とかみ雄略紀ニハ呼吸とかめり皆息吹は氣なり多

多萬葉ニ神風ニ伊吹惑つ神代紀ニ吹撥之氣化為神云ふ是風神也と

是ゆ○近江坂田郡は膽吹山も山神毒氣ありて名く日本武尊は故事日本紀ニくはし○十訓抄ニ天流ゆ伊吹は山ゆり延喜式ニ石榴郡伊吹富伎神社ありこれ皆ものいぶきハ神ものあづかれこれ皆ものいぶかし　万葉集ニ鬱悒とかめり今人石害とかめり故迷ひとかいぶきとも勤はなをりてもえぬとかるとかいぶハ氣吹は氣かハ希ふ縛も

いぶせし　万葉集ニ欝悒とかくもかめり又いぶせくともかくもかめり物俗

まそいぶとかめるさまをいふ俗ものいぶくさ

いふきと　中古稿ニ氣吹戸とかめり洋中氣と吹出を吹といふ吹は生

なり氣吹戸生とかめり物を吹ハ必息吹すゆの故ニ世言ゆり橋柴門

ものいふ氷吹生磐土命と神代紀ニ吹ゆ

△いへ　家といふ和名抄ニ第宅もかめり周伯温云家居之圖曰家故ニ人々

ハ家後人借為室家之家と小雅ニ戶牖之間謂之扆其内謂之家とかめり

五戶は家なり　若狭紀ニ五家相保とかめり是ゆり光仁紀童謡ニ曰ふ

五家ゆ五家ゆ　ものいふ　云ハ稿ニ見り○成ハ字汎は吉兆

ものとも室ハ家也と宮ゆ外ハ釋名ニ室實也人物實滿其中也とかめり

いへで　貞観紀ニ出俗家別ゆり俗人といふ家別ゆり得度なり○

延喜式ニ凡神戶百姓不得輙令得度とかめり○萬葉集ニ世は中とうしと

おもふそ家出もしてしかめハ今は俗ニ云ふ

いへども　雖字ニ云ふ稿ニ人いかもなといふ雖言二字は云

神代紀は行ニとどくあるも同し

いへとど　霊異記ニ家室とかみ遊仙窟ニ主人母とかめり源氏物語ニもかく

うり家ヲ自れ家かり家ちる女といふ伊勢物語ハ論語の邦君之妻自称曰
とゝろゞとゝべゝろゝ家童子とゝ云家ハ小童れとゝ云家ハ小童
いへばえゝよ　六帖よゝゆえハ江の家ゝゝ云ゝ云ゝ続古今集
あびつく我ゝけるあづさもはゝゝゝゝゝれゝり
易ゆゝと言不盡意とゝゝゝゝゝと言則不得其ゝ云ゝ集ゆゝ
ゝゝゝゝゝ

亦御り又況文ハ今ハ多くと日ふ是も口語ハ多く信ハやぞといふ同し

いまぐ　ホ字とあり神代ハ伏ハ不今ハ此家と云ふ赤ハ己ハ對する神所ハい

まぐしきく暗してまぐとも云ふまぐ和も見ず天ハ地ハ是ハ又まぐ

とうそ再ひもとむハ和漢の例しうて所言ハ用ふるもいうていまぐと

ふみうて古事紀ハ所ハいまぐとかどてと見ふう○万葉集ハみゆきハ

ものまぐ多かも古今集ハ是ハけて嗚ども伊ハ雲ふりつて源氏物語

ハ光源ハまぐ多りまとい新西ハ多紀ハとハ今ハ将ハ嗚し

ともいう或ハ是ハ文章ハ多ハ猶字ハ一とハ○語ハ多ハ

論語ハ未也注書ハ未耳とあり易ハ指ハ未者非遠之辞とあり

います　在字とあり坐ハ同し今ハ坐ハ辞ハ略して多とハ

延喜式ハ多とあり及ハ○万葉集ハ多ハ

いまし　日本紀ハ爾波乃ホとあり坐ハ西ハ座下とあり

んぢハ古語ハ新撰字源ハ你ハ多とあり○乃ハ字とあり

まし　ましとあるハ古語ハ古語ハ古語ハ羽根とあり

ホ多ハ又ハ多ハ祥ハ多ハ

及ハ

いまむ　戒とあり今忘ハ義なり○勅とあるハ誡勅ハ義と警字とあり

同し○猶とあり上とあり禁戒ハ義とあり

いまいり　齋とあり及ひなり○いまひハまひるみあり

いましづと　古今集ハ定家ハ今ハとあり万葉集ハ今時者四

とあり上とあり上ハ猶ハ字ハ猶ハ

いますがり　物語ハ在ハ

計利と多ハ今ハ今ハ

氏ハいますがらハ物語ハ

いまくあり　源氏物語ハ今ハ

う今良とあり又今ハ

ハ凡納婢僕初來時曰播盤珠言不撥自動稍久曰算盤珠言撥之則動既

久曰佛頂珠言終日凝然雖撥亦不動とゝ云てゝ佛頂珠等といふ是なり○倍續よ以也彩糸とゝ云ふ王渙之ゝ語よ仕官常以其不遇處之則無事とゝ云ゝ云へゝ○今良八主殿寮の下部ゝ云て又女今良ゝ

△いみ　忌とゝ云ふいみのかゝるなとゝ云ふ是なり江次第よ御忌幼文御八卦也とゝ云ふ○いみあるなとゝいふ文字ゝ味ゝ音し

いみや　言事記よ忌矢とゝ云ふ其廟人先忌矢可弾とゝ云て神代紀の反矢可畏ゝ云ゝ云へゝ○愚昧記よ齋屋とゝ云ふ今よみやといふ是也とゝ云て○ゝ云ゝ紀よ人死ゝ忌ゝ小行ゝ忌ゝ矢ゝ造り門よ懸て忌屋ゝ幼子是ゝ忌屋講ゝ

いみな　諱とゝ云ふ忌名ゝ云ふなり生ゝ名とゝ云ふなり諱とゝ云ふなり續日本紀よ光帝御名及朕之諱とゝ云て諱ゝ御名ゝ称ゝ云ふ異邦ゝ史ゝ諱とゝ云ふ字ゝ忌ゝ字ゝ犯せるもの多し

ゝ張世南ゝ游宦紀聞よ委く辨せり○二條家よ世ゝ軍家ゝ諱ゝ字ゝ忌用ゝ云ゝ云へゝ小廉苑院ゝ附の二條滿基公ゝ諱ゝ始ゝ

いみとす　忌行とゝ云ふなり忌ゝ云ふなり式百番奇

合よ於忌家

あよあるる神ゝ忌ゝ忌ゝ印ゝ抜ゝ乃ゝみゝ神ゝ忌ゝ

鴨注進記よ令陰陽大夫於祠官家ゝ門ゝ立忌竹ゝ禁僧尼重輕服織人ゝ忌ゝ云ゝ

△いむ　齋忌とゝ云ふ先ゝ敬ゝ慎ゝ心の古語ゝ云ふなり神代紀よ畏字ゝ云ふ氣ゝ云ふ出ゝ云ふ訓ゝ云ふ

むなり○神代紀よ悪字ゝ云ふ忌字ゝ云ふ云ふ云ふ反

いむべ　日本紀よ忌竈ゝ云ふ神代紀ゝ○今ゝ世ゝ云ふいんべやきゝ云ふ忌竈焼ゝ云ふなり伯耆の忌部ゝ云ふ出ゝ云ふ也ゝ云ふ○忌部ゝ氏姓天太玉命ゝ孫ゝ三代実録よ忌部為齋部ゝ云ふ

いんど　印度ゝ天竺の正名此ゝ云ふ○齋戸

ゝ云ふ祝詞式よ鎮魂齋戸祭ゝ神祇官ゝ齋院ゝ云ふ四時祭式

よ右於此官齋院中臣行事ゝ云ふ忌ゝ式ゝ十二月ゝ祭ゝ今

儀式ゝ云ふ十二月ゝ嘗祭ゝ忌ゝ嘗省少ゝ行ふ

事なり○清和紀に盗入神祇官西院齋戸神殿竊三所齋戸の衣及
乘輿結御魂緒とゝ云ことゝり
いんぢ　平安初期に向へ礫印地ともゝ云ことゝり石擊に東國通鑑に石戰といふ
為る是なり平湯に遊戯いふ人倭韓ともゝ云ふ事成ハ引陣に文字
と用ふるハ行長記に河原印地ともゝ云ふ天和氏に云ふ豊臣家に時ま
てハ盛衰記に河原印地ともゝ云ふ端午に町々に端午にいんぢ打もろかゝと云
かゝ一屏風に者ゝ曹を蒙り紙に張り押立勝負力ぬゝつゝて敵ゝ
なりとゝ近ゝ云ふ中世に田舍に八川と満てゝお射て石を擊ゝとゝり寛永
中令とゝして是を禁ぜ常陸若城に八川と満てゝ手火松を打合互に小
屋を造ゝ小屋ゝゆゝと負ゝて止ゝ○平安ゝ熱田社に式あり
いんび　忌火とゝみゝゝゝり又いんこゝゝゝり沐ゝ御竈神に名なり
六月十月十二月一日に忌火に沐浴に肉膳司に至
神態鑽火炊爨謂之忌火とゝ云ふ文注実録に齋火武主比命とも云ふ
○火ゝり穢に云ふ我邦に法に兼良公に云ふ水火是天生之物兄分深浄

而神事忌火何也曰火雖是淨因物而穢故不食炊爨之物而已とゝ云ふ
○多賀社に日本第二忌火とゝ云ふ
いんさい　神代紀に昔に訓一皇代紀に曾もゝあり往一前に為ゝ云ふ
いんけい　巫婆宝珠の如と見に額に搽に是ゝ一説に大に来に為ゝ云ふ邪
に汚に正ゝゝゝゝ小児の額に大字に臙脂に云ふ
ゝゝ成ハ風俗通に楚俗以八月以朱墨點小児額為天炙以厭病疫
ゝゝゝゝ
いむてゝつゝ　忌云月に為ゝ獨物に為ひて為ゝ云ふ白樂天の詩に莫
對月明思往事損君顔色減君年ゝゝゝ○兼良公に為ハ云ふ
を方つゝ云ふ
△いめ　夢に古語ゆめゝゝ云ふの事ゝ寐見に為ゝ
いめびと　万葉に射目人ゝゝ猟場に射手ゝいめ人に伏ゝゝ
ゝ目伏ゝゝて伏ゝ云ふ射る為ゝ射目立てゝ

足田射部に見えたり

△いも　妹とよいハ兄弟もハむつまじくしたしきことなり万葉集に妻より妹人をいふ兄姉より妹人をいふ弟より姉を指ても他人をも女をもいふ呼び女をも互に指ていふ男子より叔母をうく事万葉集に見えたり同集に奇り

妹とはなにかしたしきかよかけまくかしこみ家もあるを

さ[illegible]人よハ妹をいとぬ事なきとはなり○芋ハ万葉集にうもとなりいり

和名抄に芋つゐを引き乎毛乎里いもを見し芋に対せる語なり人に咽と戟をうゑぐいもといふ又栗いもいり栗ゆ一京出れ

俗ありうといふ○河内国志紀郡ハ芋を出す伊勢国三重郡に一村ハ

生して食ふ庖丁○歳首に芋粥をすゝるとする気ふを祝する歟へしいと名

ものかれよりあり○七夕に芋に表をうて奇をかく故実ハいと世に表を

うり初めるなり新勅撰集より

草に上の表をうゝ歌の玉つさに新撰に見えたり

今芋に表をうゝ表汁に稚行を出ていとこ○姉ハ石見国より

万葉集風土記に足柄郡青野嶋といふ又紀伊より

いもせ　妹兄に表し夫婦をいふ夫ハ長一妻ハ弱けれハ同類なるを比せる質朴

なり上古に兄弟と西土に夫婦をいふ兄弟と半一夫を伯とも

仲ともいふ事も見へ北齊ハ妻を呼て妹といふ也ものを代紀に夫

君をあせをとみとをみ婦をさして汝妹尊なとはさまり雄略紀ハ新妻

為妹蓋古之俗乎とをこをり諸冊に見えり出雲風土記に延喜式に

伊侘奈伎伊装奈美命妹妹とをこをり妹ハ夫に表字書に女に子に対い

ろ妹に除考へ○二ものハ化生に始めなれハ論なし形化に従ふ也古ハ同姓

をこをこハ親族をさけど近親をハ異母妹を娶ることを多し是を口實とし國

風とし神化にしたがひ禮法をこをりうる今世に表に数に歌に表へ

禮を制せるを草昧に俗なるハ人事を論し所業を辨へを擬ひを甘するに

徒にうゐに神聖に罪人なるをや○妹背ハ紀伊に見えり二ものを隔てく相

向へりこを万葉に表せるものをいふ也ものを表に見えたり

[illegible]

いをひ　齋食はもとなり日本紀に齋食をいをひと訓り
鴨長明の方丈記に[illegible]ひとつあり精舎はもと齋宮をいをひ
はもとなり○[illegible]小ハ齋庭なり神代紀にもゆふはと別書
為象[illegible]なり

世はもとなるよりはなるとなるのはもとなるのはもとなる

いもうと　倭名鈔に兄の伊勢物語に妹人のいとなつかしけれとそ勝言集
罪障記に花茎紀に兄の伊勢物語に妹人の[illegible]
を海く妹なりとて狭衣にもそれをとうけてまく妹とかり源氏にもこれ
同腹也にもこれをうけるまくを妹とかりひてふるいひ給ふ姫君は
せうとにもとうかくおもとにもとうとうえの物語にも中君は君妹にして
君を意し宋書に玉璽集り妹は[illegible]
ゆりもくり[illegible]ハ[illegible]

[illegible]

△[illegible]　[illegible]の[illegible]○彌[illegible]氣[illegible]
[illegible]元正天皇は詔及祝詞に彌高に彌廣にあとをいとやはは[illegible]
[illegible]とは[illegible]○君を[illegible]
[illegible]全浙兵制に不要を選ぶ○河海[illegible]
乃いやとは[illegible]
劒なりとそ肥後は五[illegible]
いや　鄙又卑賤をいふ彌下の義なるへし日本紀に微をもとみ霊異記
[illegible]斯下をいふ

いやちこ　日本紀に灼然とあり弥迩とあり一万葉集に八ちぢと訓り

いやーしな　苟字をよめり聊尓粗略なるを苟賤之行と云ふ結果なり例

るるなくーいかゝあるーもとゝなるとゝ云ふ草率也と注せり義経含状に義経

いやーしも清和は臺をかりなとゝ云ふ賤しくるものゝ○苟字は語意に

よりてゝみ変る論語に苟有用我者なとゝ云ふ苟猶若也と注せり

大学に苟日新なとゝ誠也と注せり孟子に苟得其養なとゝ云ふ

ーー論語に苟合とゝ云ふ

いやつぎつぎ　日本紀に子孫を例せり万葉集に彌継嗣とゝ云ふ

△いゆ　愈とゝ云ふ痛止は疾やむ反ゆとゝ云ふ今愈は疾こやをゝゆとゝ

いゝるとも云ふ反ゆ

△いよ　伊豫は玉八大八洲の四に第二次に出生は例なれ八弥は疾なりと

云ふ説と伊豫二名洲と云ふ説は本名なり○伊豫蔓八蔓州なり

いよく　愈又彌字をよみ結語に八誠をよみ逾八愈に同ーー万葉集に

よとも云ふ説は愈八過也益也と注せり弥八進也益也と注せり

いよやう　文選に森字を蠶字をよみ畜事紀に岐嶷をよみ三代口記に

やうとも新撰字鏡に森くをやうくとよめり弥八弥くは眞草共に密なるく

△いら　倭名抄に苛字をよめり玉篇に小草生刺也とゝ云ふ薄苛を凍るごと

いらくするとゝ云ふ倭名抄に魚鯁又八芒刺に中ーーをいらつくと云ふ又いらとも云ふ

○新撰字鏡に刺を訓ーー南に本朝にいらとゝ云ふ

いらー　神代紀に素戔嗚尊を人ーーとゝ云ふ日本紀に貸稲

をいらーーと云ふ説と云ふ貸税をいらしと云ふ説とあり

をいらしう　倭名抄に利息をいらしうとゝ云ふ

いらく　倭名抄に芒刺を倭名抄に茨刺也とゝ云ふ

いらくーいらくとも云ふ

いらゝ　和名抄に鱗を倭名抄に魚鱗は屋とゝ云ふ

いらつこ　日本紀に郎子をよめり色つるは色とゝ云ふ

いらつめ　日本紀に郎女郎姫娘子をよみ始まるを嬢とゝ云ふ

郎女大嬢子をよめり

いちなく　たゝ物徒に疲れいとなくなりぬる字治拾遺かいとなく記
たゝかさ　たゝかさ又いとなくもちろき大鏡よひ史ふんださみは挟えいとなくふる
まひて流徒なるを市こゝとくしくしひもひ出なしていとなくふまひてとんとう
苛なくれ変なくハ助徒いとなげくと同変なるへし
いらなげく　日本紀万葉集に苛なるとう苛嘆れ変痛切れたまふ一説ふ
なげくハ助語字書に苛ハ煩也急也とんとうるさくともいふ
△いと　槭といふりひれ糸結ひもまた倭字○あぶら糸紀に何かしれい
まとかやいふ所りあやしれ紙ふ所をかりてとんとう○琉球に深奥れ
浙と凡て物をいふ入れ変なり
いとひ　岩字を訓せり玉篇に日欲夜也とあり○入日れ岳ハ流音ふ切り
いとかが　一書に入外と書り八雲抄に云契れいとかがふたなへハ雰れ切り
△ふの　ふの字れ嘉字けて云たけてなといふ風俗なりと古せまりまふ小熱火香れ変
事実に変さかりとうるといふかや
いとひ　日没といふ日れ入るとうとう晩強なれ所ふ所り或ハ返照なり

紙因法源
字書に書れ字ふまこゝとうるハ入相れかまに変やちるとん
錢起ふ詩に長樂鐘聲花外盡れこゝり
いとはや　源氏に弄れ絃れまくしやう細流に舞有取綾手故云入綾
ともろこう或ハ入調なるあり
△いる　入と射と鑄と熬と平上去れ別なり是ふ中に入と熬ハらうるれ
音に用らけり射と鑄ハいの一語也○俗に金ふいる泊ふるあとふ入用れ
変西去れ俗語に泊といふそ泊をもちうとうあり○祇代紀に後字肉
字をあるも入に同し
いぶかせ　文選中の忽諸をあり俗にゆるかせとも也ふ新撰字鏡に當ふ
堂ふを同しくいぶかせくあり
△いとこ　肉子れ変西去れ也ふに変ふ也ふ又ふ匣九ふ匣なと
ふとこう○肉子義ふり肉子菱ふり
いとひと　雌紋雄紋とそ乃を取合せて結ぶあるとうとう○古今

第ようを細に同しかまくひてんとあるハ同心結に謂て趙后外傳ま

五色同心結一鞶と云へり

いきずみ　黥てよめり入墨に反なり又入ずみとも云り明律まに訴に

刺字なり劉音ともゆゑと刑名なりと俠客なりに彩ようるゆゑ

滸傳ゆゑに云へり

いまこざけ　本朝式ま内子鮭と云へり今いまこざけと云へり

いまかくび　類聚雑要鏡筥に陳ま云へ台記ま入帷と云ゆゑなり

ひらづくみのうハぎ　伊勢奉幣使記ま御扇一枚入帷一條白

張と云へ雅亮抄ま香壺に筥こすりに筥ふもなり

△いろ　色といふ色めくいろどるなりと云ふ色なり日本紀より基もあり○

砂石集りかつハ云へなり　とも云へ云ふ今いふ色ふに縁あり

色とも云へり○精氣を色といふ日本紀ま初を云と訓

なり素問ま

色に云へと云ふまより多く素問ま初

○倍ま女に事とと云ふ毛詩乃序疏ま女有美色男子悦之故経文通謂

女曰色と云へり○喪服とのもゆゑに喪ま居人

ゆゑ衣と云へ云へ云へと云ふ古書ま云へ今入も

いろなり後古今集

ぬきすのうちかひてそなけき春衣今ハ色なる紙に云へり

○倚廬ハ諒闇に所と云へり板屋と下てなり葦に簾布に帽額に鹿

服を用ゆゑ

いろは　毋に古語に祇代紀和名抄ま母ゆ色身ハ母より受ると色毋に義

なりと云へ実母に云へ○色といろはと云ふ八方に集ま云へ云へ又毋を

いろとに云へ云へ云へ云へ云へ云へ云へ云へ云へ云へ云へ云へ云へ

沿めく州本も筆をみて何と云へ云へ云へ云へ云へ云へ云へ

もとに云へ白素に云へ云へ云へ云へ云へ云へ云へ云へ

○童蒙に云へ云へ初めよりの云へ云へ云へ云へ云へ

○わらひ笑ひ云へ云へ云へ云へ云へ云へ云へ云へ

837
34
48

○山槐記は今日訪三藏院法印次伊呂波とゝゆ千字文ゝゆ次韻とゝて
うり梵字をつゞれそとゝそう○西行談抄よりいろはよみの所
所にはゝくゝ此物を紀ゝて藤こそいかけ結ひ
いろと　日本紀は弟又女弟をゝあり いろはにとは略同母弟をいふかり○
妹をもゝあり古事記はハ伊呂妹と書せり○一説よいろハ家等をゝあ集
り家等をいはゝとゝゝうり
いろ絲　日本紀は兄をゝ姊と訓せり絲ハとゝ同韻通す同母兄姊をいふ
名茶記に姊といろはと訓しハいろ絲の謬なり○色音とゝ音聲は色なる
をいふり又ゝゝ兄をゝとゝゝ二項は省へし
いろせ　古事記は須佐之男命語云吾者天照大神之伊呂勢者也とゝて
うり同母兄をゝゝゝゝ仁賢紀は古者不言兄弟
長幼女以男称兄男以女称妹とゝて古事記は伊呂兄と
をゝゝ京本集註序註も此ようて天照大神はゝゝゝゝ也とかゝゝゝ
乃ち系ゝ

いろう　拾芥日紀はいろうはそとゝゝうをゝ若は式紀日
紀ゝゝゝ流紀は弟はあれゝゝうかゝりいろうとゝり○外宮は色
節内人あり朝野郡載はゝゝ
いろく　ゝゝて語はいろ色ゝゝ語ゝゝ又雜色をもいう
いろ神のこ　日本紀は兄子をゝあり姪をいふ○いろはゝ弟をゝあり
△いろけ　日本紀は驚駭をゝ又喘息もあり強く時ハ必ゝ息ゝあくぐ
ものゝ息ハ同形如へし○駭悅をいろけ
いろけあるゝ　幼稚をゝはよかくいろいろけ
ゝゝゝゝ

国立国会図書館　タイトル『和訓栞』　請求記号 837-48

ガラス使用